

浦河の都―仙台いさばのひとりごと

時は明治四十年の秋である。天秤棒を担いで魚を売り歩く行商人がいた。四十がらみのこざっぱりしたいい男で、ひとり暮らしだという。出身が仙台だというので、町の人たちは彼のことを“仙台いさば”と呼んでいた。行商人があちこちから入り込んで、古着や荒物などを売り歩いている。そうした数多い行商人の中で、彼が人目を引くのはチョットした訳があった。

この男、たくさん買ってくれるとそこの家をほめまくるし、買わなければボロくそにけなして歩く。何とも勝手な男なのだが、それがそのときどきでコロコロ変わる他愛のないものだから、どうにも憎めない。今日は誰がやられる番かと、子どもまで大人に混ってニヤニヤ聞いている始末だ。子どもたちが集まって来ると、彼は子どもに相撲を取らせて、勝った者には褒美を出す。一銭か二銭貰った子どもが、あめ玉などを買いに走るのが楽しくて仕方ないのである。そんな男だから子どもにはとりわけ人気があった。

この男、このところ毎日ウロコベツ（現大通五丁目）方面へ商売に出かけて行く。小さな店や一杯飲み屋が、マルマン（現丸京）から金森菓子店（現仙道商店）まで、切れ間なく続いており、この辺が浦河の繁華街である。町の様子を、話好きのこの男に語ってもらうことにしよう。

この辺の話かい、よしてきた。

ウロコベツ川を渡ると、まず右手に見えてくるのが「マルマン」。ここは料理屋だ。低い所に建っているからチョット見には分からないが、三階建てなんだ。昔は流行（はや）ったかもしれないが、今じゃあすっかり古ぼけているよ。芸者あがりだっという女将（おかみ）がいて“袖口から緋縮緬の長襦袢を覗かせた、ほっそり美人”だなんていうもんだから、チョットお目にかかりたいもんだと思ったんだが、あそこはケチだねえ。「アブラコはいらない」ってサ。愛想がないや。あれじゃ噂は本当だ。あそこの芸者が客とゴタゴタ起こして首吊ったって話さ。その柱から、取り替えても取り替えても血が吹き出てくるんだと。俺が見てきた訳じゃないがそんな話だ。

その隣にあるのが鍛冶屋。置いてあるのは鍬（くわ）、鎌（かま）、斧（おの）や鉈（なた）ってとこだな。料理屋の隣に鍛冶屋ってのも色気のない話だよ。そう思わないかい。トンカン、トンカン、毎日にぎやかなことだよ。それにしても刃が欠けただとか擦り減っただとか、ケチな客が多いねえ。しばらく見てたけど新品が売れた気配はなかったし、あれで儲かっているのかねえ。

次の傘張り屋は「かづさや」っていうんだよ。この間の嵐の後だ、景気が良かったねえ。ドンと買ってもらって、あれは俺も気に入った。良い男だね。

次が菓子屋。あそこは馬宿もやっている。覗いてみたら馬房に馬が二頭繋がっていたよ。静内と幌泉（現えりも町）からださ。二人とも裁判所に用があつて来たっていうことだった。なるほど馬宿とはうまいことを考えるねえ。馬を連れてちゃあ仕事にならんし、遊びにだって行けないわなあ。馬はそのあいだゆっくり草でも喰ってひと休みだ。帰りにまた乗せて行かなきゃならないんだ。ひと休みくらいさせてもらったってバチは当たらないサ。

それからもうチョット行くと餅屋がある。ここの孫娘は芸者だそうだよ。ばあさんと二人で住んでいる。ばあさんの娘がひとり、向かいで「あけぼの食堂」ってのをやっているよ。あの孫娘は気立て

の良い子だねえ。別に買ってもらったから言うんじゃないが、ああいうのに良い客が付くんだ。きつと玉の輿に乗ってばあさんに楽をさせるよ。

その向こうに「竹の屋」と「竹川」っていうのが向かい合っているだろう。あれは姉弟で、「竹の屋」の栴谷舛蔵（ますやますぞう）は「竹川」のかみさんの弟だそうだ。にぎやかな三味線の音が聞こえるから、ちょうど馬で通りかかった炭売りのおばさんに聞いてみたんだ。子ども芝居をやるんだってサ。竹川でやるそうだよ。俺はてつきり長盛座だと思ったら、あそこは本物しか掛からないんだってサ。本物ったってドサまわりの芝居だがね。

そういやあ遠藤柁屋が“えびす座”とかいうのを作りたいと言ってるそうさ。あそこは金持ちだからねえ。遠藤のおやじ、初次郎っていうんだけど、奴のかみさんが向かいの政田の出だろう。その親戚連中だとか井上石屋の息子なんかもみんな弟子入りしているんだ。弟子の数が十一人だって。何でも建てられるよ。金ってのはある所にはあるもんだねえ。

それから浦河病院の三沢先生は今度開業するらしい。随分人のために働いたからねえ。おと年（明治三十八年）の凶作のときには故郷（くに）（宮城県）に大金を寄付したっていう話じゃないか。そこいらの貧乏人からは銭も取らないっていうし……。かみさんがまたしっかり者のできた人らしいよ。あんな良い人に子どもが無いなんてねえ。養子にしようかと思っていた子は昨年大阪の学校に行ってる時に死んじゃったって……。今まで聞いたこともない、ジフテリアとかいうおそろしい流行病（はやりやまい）にかかったってことだ。なんてことだろうね。全く……。

そういやあ、昨日は貧乏長屋の前で、乳呑（ちのみ）（現東町）の奥から来ている野菜売りのおばさんに会ったよ。貧乏長屋ってのは、あの稼ぎ人らの住んでいる所サ。そのおばさん、ネギとイモとダイコン売ってるじゃないか。くつついていって「かじか鍋はどうだ」って……。うまうまいったねえ。この頃は野菜売りも馬だ。チョット前までは籠をしょって歩いてたもんだが……。そのあとは藤田のそば屋でもつきり一杯ひっかけて、長盛座の沼の淵で遊んでいる餓鬼ども集めて相撲取らせてサ。ちっこいのに強いのがいて、おもしろかったなあ。

[文責 河村]

【話者】

高木 アサ	浦河町堺町西	明治二十七年生まれ
遠藤 一郎	浦河町東町ちのみ	明治三十二年生まれ
	(平成三年十月没)	
三沢 敏子	浦河町旭町	昭和二年生まれ